第4回大学施設マネジメント研究会

〈開催日時〉2008.5.27(火)　14:30-19:00

〈開催場所〉名古屋大学　東山キャンパス　野依記念学術交流会

1.開会挨拶　名古屋大学　理事・副総長　杉浦康夫

2.来賓挨拶　文部科学省文教施設企画部　参事官補佐　南保政弘

3.講演-1

「ガイア・イニシアティブー地球環境対応と日本文化ー」　NPO法人ガイア・イニシアティブ代表　野中ともよ

4.講演-2

「地域戦略から見た大学間の国際・地域内連携と、必要な仕掛」　名古屋大学　教授・環境学研究科長　林良嗣

5.ラウンドテーブルディスカッション

進行役　名古屋大学　教授・施設計画推進室長　谷口元

名古屋大学　講師・施設整備推進室　恒川和久

6.閉会挨拶　名古屋大学　施設管理部長　山口博行

研究会のテーマ：地球環境時代の大学経営

1.開会挨拶

名古屋大学理事・副総長　杉浦康夫

・国立大学は法人化され施設をどうマネジメントしていくかが重要なってきたため、名古屋大学では国立10大学のベンチマーキング行った。

・大学の活動が活性化すればするほどエネルギーを使うという矛盾も出てきた。今のままの原単位でいいのか？そのために、環境負荷を減らす施設マネジメントの方向を探っていく。

・中部地区で大学施設マネジメントコンソーシアムを設立し、より良い施設マネジメントのあり方を検討する。

・データを取ってみると、大学の規模や国立私立などの違いで大きく異なり、考え方や対応の違いが認識できた。

・国内ではそういう大学施設マネジメントの協力対策がないが、欧米ではコーネル大学を始めマスターコースの協力体制がある(第2回議事録参照)。

・日本では事務員が行う旧来の施設管理の認識しかない。しかし、大学とは教育を通して新しい時代を担っていく人を育てていく使命がある。

・コンソーシアム・教育・環境負荷という視点を持って、この施設マネジメント研究会が１つでも役に立つ会になればと期待している。

2.来賓挨拶

文部科学省文教施設企画部　参事官補佐　南保政弘

・過去3回の研究会ではFMを大学教育にどう取り組むか、ベンチマーキングをどのように行うかが話し合われてきたと聞いている。

・成果の一例としては、国公私立大学の連携の地域FMコンソーシアムの設立が先進的な事例である。

・今回のテーマに即して言えば、温暖化対策を EM（エネルギーマネジメント)、FMで行うことが重要視されている。

・この研究会がFMの先進事例として発展していくことを期待し、文部科学省としても協力できるところは一緒に取り組んでいきたい。

3.講演-1

「ガイア・イニシアティブー地球環境対応と日本文化ー」

NPO法人ガイア・イニシアティブ代表　野中ともよ

□サンヨーは売上2.5兆円、創業60年近くで、3つの大洋に通用する企業として創立された。

・2005年まで3年間そのＣＥＯを務めた。2007.10に「ガイア・イニシアティブ」を立ち上げた。

□何のためのＦＭなのか？コスト削減が方法論であったのは昔の話。

・アカデミアそのものが、何のためにどんな施設をつくるのか、教えるのか、学ぶのか、どんな人を創るのか、どんなゴールを目指すのか？

・どんな施設を作るのか施設効率利用だけの方法論ではなく、ゴールを見据えて事実を創る。このゴール設定に一番近く、マネジメントできる場にファシリティがある。

□高度経済成長下での1950年代のパラダイムの上に、これからを作り上げてよいのか？

・「地球にやさしい（人間主導）ではなく、地球が喜んで（地球上位)

くれる」地球に生かされている（MOTHER　EARTH）考え方が重要。

・アート・デザイン⇔水・食糧・空気・エネルギー⇔地球・コミュニティ

・ミッションは、汚れた空気・水をクリーンに、地球が、命が喜んでくれる先端力をアップし、環境汚染から環境創りを、テクノロジーで解決しなければならない

□ガイア軸の考え方導入＝地球が喜んでくれるか

・効率軸・収益軸だった手法から、ガイア軸を加えた3つの軸で考えていく手法へ。

・「GAIA」はイギリスのジェームス・ラブロックが提唱した「地球は一つの生命体」という考え方で「命の輝きのあるインフラがあるか」を重視する。「幸せの目盛はお金の目盛」の大量生産消費に対立する概念

□Facility Management をEarth Management へ

・世界トップの環境技術力とものづくり力という、21 世紀の日本力を世界に発信する。

日本古来の地球と共生する価値観と文化－生きているのでは無く活かされている。「ちぃさきものにかみやどる」－木・森・風・海・虫・花。地球の森を支えたい。人間は木の寄生虫。「世界鎮守の森」作戦

ECO 地球儀－直径1280mm

4.講演-2

「地域戦略から見た大学間の国際・地域内連携と、必要な仕掛」

名古屋大学　教授・環境学研究科長　林良嗣

・自身の専門は交通であり、実はそこで話合われていることと今回のことは似ている。

□経済社会の変化と社会インフラの役割・評価

・20 世紀では目的が経済成長であり、道路や建物などが必要とされた。一方、21 世紀は豊かさや満足度が目標であり、「知識交流のためのインフラ」が必要とされる。

□地域の活力と戦略

・20 世紀は資本集約型であり、コンテンツとしては工業製品。

・21 世紀は知識集約型であり、コンテンツとしては、学会事務局、セミナー活動、出版、放送、インターネット…etc。

・そのために大学は非常に重要な立場を果たす。

□国際連携/地域内連携

・国際学会や芸術・デザイン活動をどう引っ張ってくるか？

①　国際学会

・ただ開くだけではなく、「事務局」を引き受けることが重要。若いうちから、国際的に活躍する方に接することが大事だ。

・優れた論文を読んだり編集したりする場の提供を行う。

②芸術・デザイン活動

・　Leeds 大学では3年に一度の国際ピアノコンクールを開き、地域に100人ものピアニストがホームステイに来る。

・大学が先導することで、地域が生で芸術に触れ活性化する。そういう芸術活動を行うことで大学も地域も一流のもので一体化していく。

・名古屋にある芸術関係の施設と連携していくことができるのではないか？

③　大学国際コンソーシアム

・AC21 では20歳の学生が集って未来を語り合う国際学会がある。これは名古屋の大きな財産である。

－誰の国際化か？（環境学研究科の試み）－

・外国人教員が極端に少ない。

・学生は英語が劣っているだけで、質問などの表現力は劣っていないので、もっと超一流の先生に触れる機会を作る。（フォン・ワイツゼッカー教授・デュール教授）

・市民は万博の関係上多彩な国際交流の場を持っている。

－アジア・アフリカ人材育成プログラム－

④必要な仕掛け（ハード）

・日本より後に所得が上がった国（中国・インド）は日本よりはるかに国際化されている。

・大学内の必要な施設としては、総合コンペティション施設やホテル、産学官連携レンタルオフィスなど。国際共同研究を行う

⑤必要な仕掛け（ソフト）

・他大学と連携を行っていくことが大切である。

・相手は東京や大阪、ロンドン・カルフォルニア・北京・デリーであり、名古屋は他国に有用な価値を生み出して、共有できなければいけない。

5.パネルディスカッション

進行役　名古屋大学　教授・施設計画推進室長　谷口元

名古屋大学　講師・施設整備推進室　恒川和久

□概要

－経済財政改革の基本方針2007 大学・大学院の改革を推進－

・国公私立大学連携による地方の大学教育の充実

・大学地域コンソーシアムの形成を外部貢献へ

専門職能としてのFM 領域の育成と大学群全体の施設共同利用。社会資本を活用連携

・名古屋大学環境方針―様々の環境負荷削減

椙山（椙山女大）－国公私立大学連携の事例－

・名古屋地区には学校長会があり、全国でも稀な例となっている。

・連携には何を軸とするのか？が重要なポイント

三浦（三重大）－ISO1400 は学生参加型取得－

・ミッションステートメントは環境で、「地域に根ざし、世界にのびる独自研究を、教職員が一体となって、人と自然との調和による環境先進大学を目指す」

・2007.11.19　ISO1400 の認証取得（キックオフは 2006.2）

・環境 ISO 学生委員会の活動を重視し、環境マインドを持つ多くの学生を輩出している。

ISO キャンペーン、環境報告書、内部環境監査に参画し、具体的活動事例としては、町屋海岸清掃活不動、エコバックコンテスト、古紙再生、中古自転車再利用

杉浦（名大）－CENTRAL OF JAPAN より NEAR OF TOYOTA－

・名古屋は有名ではないが、トヨタは世界的に有名。名古屋地域東山地区の発信する大学力と地域力から、名古屋大学が持つ力と持たざる力を見極める必要がある。

・薬学研究科を臨床薬学分野として創設

・FM データは文部科学省予算配分の結果として綺麗に直線状に並んでしまう。大学経営にとって私学の視点は全く相違し重要である。

・FM、EM 領域での大学間の見直しが必要。日本の教育分野には無いため、教員の教育が先決で、従来は学んだ知識の縦糸で実践しているが、真の建物のマネジメントとなっているのか。本来の横串が FM であるべきで、これがコンソーシアムの意義ともなる。

・自分でやれる分野、全くやっていない分野、もっとやれる分野をしっかりやる。

山口（名大）－コンソーシアムの成功の鍵－

・一括契約を推進し、環境問題への取組みを進める中で、課題は同じ認識をもっているか、

単に付いて来るだけではせっかくの盛り上がりもつぶれる危惧をはらむ。キーマンがいなくても活動が続くか。横串で建物全体を見る視点が大変重要である。

・米国事例では、戦略を練るところにヒトとカネを投資している。FM、EM でも資金と人材を集めて横串ができる。投資をリターンで考える事が経営だ。単なるコスト削減や知恵だけでは限界があり、投資をしてダイナミックに行う省エネ・環境保全が必要である。

・国公私立の視点から興味深いのは、国立と私立では視点が異なる点。これこそ、コラボレーションの意義が大きい。但し、国立大学にはある程度人材はいるが、私立大学にこれだけのことを受け得る人材がいるかが問題となろう。投資として戦略を共有できるヒトを配置し得るか。

・コストなどの今見える実務中心となりがちだが、理念やコンセプトがあるべき、見えるべきで、結局誰のためにそうするのか。キャンパスマスタープランは理念の再確認の場である。

林－市民の QOL をどう見定めるのか－

・お金の使い方とエネルギーの使い方とは別々ではない。例えば、自動車税の視点が排気量からエネルギー効率に変化して買い替えが促進している。こうして集まっていることはポテンシャルが高いことだから、ハードの建物やコミュニティへの仕掛けを三重大学学生活動の様に各大学でも見つけていくべきだ。

椙山－私学の人材活用こそ－

・特に、私学には若い人材がいるので、活用していきたい。

恒川－都市施設の FM は研究と実践へ連なるコラボレーション－

・広小路ルネッサンスという 8 大学の建築の人と名古屋をどうするかでは、実務家が大半であり、実務だけに陥りがちである。理念としての働く環境を考えるには実務だけでは限界があり、他分野からの参画も必要。

三浦－大学環境報告書では企業と相互評価－

・法人化の並みの中で、大学間での比較は出来ていないし、対外説明も出来ていないし、データによる比較もできない。三重大は中電・シャープと相互に評価した。

椙山－国交私立大の土台の違いを踏まえた学びとは－

・FM の研究として、施設費の中でメンテナンス費を私大は掛けている。土台の違うところで行われた比較により何を学んでいくのか。

恒川－ホスピタリティサービスの FM ゴールは学生の処遇－

・施設データの並べ方だけでも大変むつかしい。しかし、一度データを並べて始めた経緯があり、初めに違いがあっても良いと考えている。又、プレゼンには病院データは含めていない。環境投資として、私学は学生への環境サービスに重点志向している。国公立大学も学ぶ点が多い。

杉浦－国立大学の施設作りの発想に間違い－

・一度建てたら、次の建替えを待つだけで消耗させている。結局もう耐えられなくなって建替えの流れとなる。建物を維持管理して、長くメンテナンスしていく思想が欠如していた。私学はいつまでも綺麗に立派に使いつづけ、メンテナンスが行き届いている。これが私大との維持費の差となっている。

・実は、維持費捻出の仕組みを作ることが一番困難で、PFI でも無理で、毎年先送りの借金返済に追われて、最後は建設資金もなくなっている。

・国立大学では、自分の給与を下げるか、研究費を下げるかしかなく、

維持費捻出の仕組みがみつかれば、大いに進展が期待できる。現状では、学生の清掃からして大変な状態。

林－評価システムの重要さ－

・評価は非常に重要で、維持管理費を含め予算取りを正しく評価する評価システムを提案していく必要がある。いずれは、提案型の研究会としていくことだ。

司会者より会場のご意見を聴取

山根－環境取組みへの学生参加型－

・学生をいかに動員していくかの手立てを持っていない。名大１万人以上の大量の学生ニーズを捉えるのは難しい。

上野－コンソーシアムが宝－

・コンソーシアムが興味深い。個別財産の大学間の違いより、共通のテーマをどう見つけるか･コンセプト･フィロソフィーの問題である。地域と大学も共通のテーマを持てるのか。千葉大では地球環境や地域の街づくりで学生と一緒に理系文系の別なく ISO 活動を展開できる。これこそコンソーシアムの意義。名古屋に限らず仲間に入れて欲しい。

椙山－調査から提案型へ－

・調査で知る段階から、提案型への変革が大事で、焦点は評価

三浦－名古屋地区から先進の取組み成果を－

・大学連携による名古屋地区の先進の成果を期待する。

林－大学構成員が責任を持って建物の価値を残していくのも展開への道－

・大学の研究者は自己中心型が多く、研究費にお金をかけるべしという人が多く、施設については理解が中々得られない状況だ。

杉浦－モニュメンタルな智の集積による文化発信を－

･豊田講堂は改修で大変綺麗になった。かなりの智が集積しているが、名古屋東山地区がモニュメントを中心に文化を発信していきたい。名大の中に智をきちんと投下していく。FM はこのベースとなるものだが、智の人々の協力を得ていきたい。

6. 閉会挨拶

名古屋大学　施設管理部長　山口博行

－教育研究への検証評価が必ず求められる。実質的な研究会へ－

・評価において教育研究の効果の検証が必要であり、本省からは検証評価は必ず求められていく。大学には政策提言も必要とされ、どういう施設をどうしたいのかが重要となる。

・野中氏の提言は FM に留まらない、FM をやって何に喜ばれるのか、地球が喜ぶのか。

・ソフト面に踏み込むには、大学部局間や部局と本部を含めて壁を破る必要がある。